心を語る おもしろい 日本語

相思草

朝風呂丹前長火鉢

くだを巻く

六日の菖蒲

朝題目に夕念仏

とどのつまり

蔵下棕它
Sota Kuramoto

グラフ社

蔵下棕它（くらもと　そうた）

1949年埼玉県生まれ。ドイツ文学専攻。現在、会社経営の傍ら、民族衣装の蒐集・研究に従事。江戸文学、料理、fishing等を趣味とする。また、カジキ・まぐろ・ＧＴなどの大物釣りに年数回釣行。

この本に関するご意見ご感想は、書名をご記入の上、gokansou@graphsha.jp までお寄せください。

心を語るおもしろい日本語

著者＊蔵下棕它
発行者＊中尾是正
発行所＊株式会社グラフ社
〒150-0011 東京都渋谷区東1-26-26
電話・(03)3409-4610
振替・00120-5-55778
http://www.graphsha.jp
印刷所＊中央精版印刷株式会社

万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします
©Souta Kuramoto 2004, Printed in Japan
ISBN4-7662-0813-7 C1081

心を語る おもしろい日本語

蔵下棕它
Sota Kuramoto

グラフ社

はじめに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

この世界にはおもしろいことばがいっぱいあります。なかにはよく耳にはしても、その由来となると知る人が少ないものや、古いことばにもかかわらず意外と楽しく、思わず「ほぉー」と感心してしまうものなど。

たとえば、「柿落し」は〔新築劇場での初興行〕のことですが、「こけらおとし」と読みます。「柿」は果物の柿のことではなく、屋根を葺くのに用いたヒノキ、マキなどの薄板を、古くは「柿板」といいました。そして家屋建築の最後に、屋根などの「柿＝木屑」を払い落したことからできたことばです。

「顰に倣う」は「ひそみにならう」と読んで、今ではおもに〔他人に見倣ってすることを謙遜していう〕ときに使われます。しかし、「顰」とは何でしょうか。

中国の春秋時代の越という国に、西施という美女がいました。西施は主君の寵愛を一身に受けていましたが、病がちなことからいつも眉をひそめていたのです。それを見た他の宮廷婦人たちは、みな西施の真似をして眉をひそめたのですが、気味が悪いと思われるだけで、決して主君に愛されるようなことはありませんでした。したがってもともとは〔いたずらに人の真似をして世の物笑いになること〕を「顰に倣う」「西施の顰に倣う」といったのです。

また江戸後期の十返舎一九の滑稽本、『東海道中膝栗毛』を知らない人はいないでしょ

うが、「膝栗毛」ということばはいかがでしょうか。弥次さんと喜多さんの徒の旅だということは見当がついていても、何となくという人が多いのではないかと思います。「膝栗毛」は〔(膝を栗毛の馬の代用とする意)徒歩で旅行すること〕です。

「馬脚を露す」もよく使われます。芝居に出てくる着ぐるみや張子の馬役は、舞台で顔を見せることは決してありません。しかし、何かのはずみに人前に姿をさらしてしまったことから〔つつみかくしていた事があらわれる。ばけの皮がはがれる。ぼろを出す〕意味になりました。

このように、少し昔のことばには、おもしろいものがまだまだいっぱいありますが、それは本文で読んでいただきたいと思います。

ところで、ある遺伝学の学者がいみじくも、「ことばは一つの情報システムとして人体の外部DNAのような働きをしてきた。だからこそヒトは膨大な知識を蓄積できた」というようなことを言っているそうです。筆者もそのとおりと思うのですが、不満もあります。現代は科学や経済が発達して、その関係の専門用語は膨大な量に膨れ上がっていますが、一方、人のこころの綾、まさに人情の機微を表わすようなことばは逆に少なくなっているのではないでしょうか。

むしろ、平安時代や江戸時代のほうが、今よりはるかに人のこころを語るに優れていた

ような気がするのです。ゆかしいことば、味のある表現、洒落た言いまわしが、それこそたくさん見つかります。

最近、電子辞書がちょっとしたブームになっています。筆者も『広辞苑』は大好きで（百科事典としてとても便利です）、いつも座右に置いてきましたが、電子辞書になってその威力が倍増しました。なぜなら、あの分厚い広辞苑も電子辞書にすれば常に持ち歩くことができるのですから。

そこで今回、本書では「便利でおもしろい電子辞書の広辞苑」ということをうたい文句にさせていただきました。筆者が折にふれて蒐（あつ）めたことばの中から、気に染むもの、愛着を感じるものを一八五ほど選んで、気の向くままの雑文です。しかし、それらはすべて広辞苑（第五版）に載っていることばに限りました。

「　」で示した関連語も、できるだけ広辞苑で確認できるように、広辞苑に載っていることばを選ぶように工夫しました。そのほうが趣旨に合ったものになりますし、また若い人が出典もわからないようなことばについて知るよりもずっと役に立ちましょう。したがって括（くく）りが一般とは異なりますが、広辞苑による語義だけすべて〔　〕で示しておきました。ただ、お詫びしておかなければならないのですが、紙幅の都合上すべての語義を載せることはできませんでした。また、多義のもの、説明が詳細に及ぶ部分は、若干の省略、

省筆をさせていただきました。文意を変えることなく、前後を入れ替えた箇所も一部あります。

もとより、素人が戯れ半分に書いたものゆえ、間違いや記憶違いも多そうです。それについては切にお許しを願いたいと思います。

また、出典についても、参考にさせていただいたものについてはまとめて巻末に記しましたが、どうしても書名にたどりつけないものが数点ありました。結果、勝手に聞き書き、引用させていただくような仕儀となってしまいましたが、それについてはどうぞご容赦いただきたいと思います。

あたかも雑文の集合住宅、百間長屋（ひゃっけんながや）のようなありさまですが、読者の方に少しでもおもしろいと言っていただければ、それにすぐる喜びはありません。

最後に、出版の機会を与えてくださったグラフ社、および編集部で一方ならぬ労をとっていただいた佐賀野氏に、心よりお礼を申し上げて感謝のことばと致します。

二〇〇四年四月

蔵下棕它

目次

はじめに　3

1章　文化　表現　成句(1)

相対死に（あいたいじに）　18
障泥・泥障（あおり）　19
赤鰯（あかいわし）　21
朝題目に夕念仏（あさだいもくにゆうねんぶつ）　23
油を売る（あぶらをうる）　25
鋳掛屋の天秤棒（いかけやのてんびんぼう）　27
馬の後足（うまのあとあし）　28
置いてけ堀（おいてけぼり）　30
囲い舟（かこいぶね）　32
唐鳥の跡（からとりのあと）　34
緩頬を煩わす（かんきょうをわずらわす）　35
下馬評（げばひょう）　37
青宵（こうこう）　38
口耳四寸（こうじしすん）　39
行色を壮にする（こうしょくをさかんにする）　40
木の道の工（このみちのたくみ）　42
逆言（さかごと）　43
逆さ別れ（さかさわかれ）　45
三尸（さんし）　46
地獄覚え（じごくおぼえ）　47
三途河の婆（しょうずかのばば）　48
湘南（しょうなん）　49
浄玻璃の鏡（じょうはりのかがみ）　51

新前（しんまえ）　53
酢豆腐（すどうふ）　54
大八車（だいはちぐるま）　55
血の余り（ちのあまり）　58
てぐすねひく　58
凸間凹間（でくまひくま）　60
伝法（でんぽう・でんぽう）　62
問い声よければ答え声よい（といごえよければいらえごえよい）　63
内界の財貨（ないかいのざいか）　63
風馬牛（ふうばぎゅう）　64
奔走子（ほんそうご）　65
名数（めいすう）　67
目文字（めもじ）　71
桃尻（ももじり）　72
横様の幸（よこざまのさいわい）　74
連理引（れんりびき）　75

2章　食物　薬　動植物

相思草（あいおもいぐさ）　78
相孕み（あいばらみ）　80
ウニコール　80
猿公（えてこう）　82
横行の介士（おうこうのかいし）　83
椀飯振舞（おうばんぶるまい）　84
鬼食い（おにくい）　85
後家縄（ごけなわ）　87
骨董飯（こっとうはん）　89
信太鮨（しのだずし）　92
食前方丈（しょくぜんほうじょう）　94
雀隠れ（すずめがくれ）　96
赤卒（せきそつ・あかえんば）　97
長命丸（ちょうめいがん）　98

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

鴆毒（ちんどく）100
天鼠（てんそ）102
とどのつまり 102
人参で行水（にんじんでぎょうずい）104
半風子（はんぷうし）105
百果宗（ひゃっかのそう）106
無塩（ぶえん）108
鰤起し（ぶりおこし）110
物相飯（もっそうめし）111
蛻の殻（もぬけのから）113
ももんじ屋（ももんじや）114

3章　女　色恋　粋筋　夫婦

秋の扇（あきのおうぎ）118
磯の鮑の片思い（いそのあわびのかたおもい）119
鼬の道切り（いたちのみちきり）120
命盗人（いのちぬすびと）122
憂き人（うきひと）122
雲雨（うんう）123
鴛鴦の契り（えんおうのちぎり）124
御釜が割れる（おかまがわれる）125
屋烏の愛（おくうのあい）126
お恐に掛ける（おこわにかける）127
偃息図の絵（おそくずのえ）128
乙女心（おとめごころ）130
思わく女（おもわくおんな）132
解語の花（かいごのはな）133

海棠睡未だ足らず（かいどうねむりいまだたらず）135
偕老同穴（かいろうどうけつ）136
貝を作る（かいをつくる）137
蛙女房（かわずにょうぼう）138
花車遊び（きゃしゃあそび）138
口の思惑（くちのおもわく）139
忘八屋・轡屋（くつわや）141
傾城（けいせい）142
恋教え鳥（こいおしえどり）143
恋は思案の外（こいはしあんのほか）144
去られん坊（さられんぼう）145
三会目（さんかいめ）147
時雨心地（しぐれごこち）148
仕出し女房（しだしにょうぼう）149
四百四病の外（しひゃくしびょうのほか）150
尽期の君（じんごのきみ）152
螺鳳少女（すがるおとめ）152
衣通姫（そとおりひめ）155
太液の芙蓉・未央の柳（たいえきのふよう・びおうのやなぎ）156
壺入り自慢（つぼいりじまん）157
取られん坊（とられんぼう）158
酉の待の売れ残り（とりのまちのうれのこり）159
とんだ茶釜（とんだちゃがま）160
比目の枕（ひもくのまくら）162
面面の楊貴妃（めんめんのようきひ）163
遣らずの雨（やらずのあめ）164
婚人（よばいびと）165
柳暗花明（りゅうあんかめい）166

4章　酒粋　脱俗　男

間の遊び（あいのすさび）170
朝風呂丹前長火鉢（あさぶろたんぜんながひばち）170
彼の世千日この世一日（あのよせんにちこのよいちにち）171
雨蛙の家（あまがえるのいえ）172
石部金吉金兜（いしべきんきちかなかぶと）173
一竿の風月（いっかんのふうげつ）174
浮世一分五厘（うきよいっぷんごりん）175
憂き世の隙を明く（うきよのひまをあく）176
内裸でも外錦（うちはだかでもそとにしき）178
煙霞の癖疾（えんかのこしつ）179
大空者（おおぞらもの）180
語るに足る（かたるにたる）181
くだを巻く（くだをまく）181
下戸の肴荒し（げこのさかなあらし）182
壺中の天（こちゅうのてん）184
三人上戸（さんにんじょうご）185
娑婆で見た弥三郎（しゃばでみたやさぶろう）186
春秋の争い（しゅんじゅうのあらそい）187
觴詠（しょうえい）189
信は荘厳より起る（しんはしょうごんよりおこる）190
水辺鳥（すいへんちょう）191
浅酌低唱（せんしゃくていしょう）192
楽しみ尽きて哀しみ来る（たのしみつきてかなしみきたる）193

てんぽ酒（てんぽざけ）194
虎（とら）195
若旅好き（にゃくぞくすき）196
鼠に引かれそう（ねずみにひかれそう）198
婆娑羅（ばさら）199
日の辻休み（ひのつじやすみ）201
鬢糸茶畑の感（びんしさえんのかん）202
風人（ふうじん）203
坊主落ち（ぼうずおち）204
正宗（まさむね）206
万八（まんぱち）206
山師の玄関（やましのげんかん）207

5章　箴言　寸言　成句(2)

当て馬にする（あてうまにする）210
蛙鳴蟬噪（あめいせんそう）211
衣錦の栄（いきんのえい）212
隠公左伝（いんこうさでん）212
魚の釜中に遊ぶが如し（うおのふちゅうにあそぶがごとし）214
内を出違う（うちをでちがう）215
海千山千（うみせんやません）215
売家と唐様で書く三代目（うりいえとからようでかくさんだいめ）216
運鈍根（うんどんこん）217
咳唾珠を成す（がいだたまをなす）218
蛙の行列（かえるのぎょうれつ）220
餓鬼に苧殻（がきにおがら）221
陽炎稲妻水の月（かげろういなづまみずのつき）221

金の轡を食ます（かねのくつわをはます）223

眼光紙背に徹す（がんこうしはいにてっす）224

紅は園生に植えても隠れなし（くれないはそのうにうえてもかくれなし）225

傾蓋故の如し（けいがいこのごとし）226

好事門を出でず（こうじもんをいでず）228

刻舟（こくしゅう）228

高句麗蒙古遁げる（こくりもくりにげる）229

三五の十八（さんごのじゅうはち）231

借金を質に置く（しゃっきんをしちにおく）232

常常綺羅の晴着なし（じょうじょうきらのはれぎなし）233

少壮幾時ぞ（しょうそういくときぞ）234

尻食らえ観音（しりくらえかんのん）235

心随万境転（しんずいばんきょうでん）236

刃を迎えて解く（じんをむかえてとく）237

随徳寺（ずいとくじ）238

寸善尺魔（すんぜんしゃくま）239

雪駄の裏に灸（せったのうらにやいと）239

刀下の鬼となる（とうかのきとなる）241

闘雀人に怖じず（とうじゃくひとにおじず）242

二鼠藤を噛む（にそふじをかむ）243

引かれ者の小唄（ひかれもののこうた）244

膝頭で江戸へ行こうとする（ひざがしらでえどへゆこうとする）245

人垢は身につかぬ（ひとあかはみにつかぬ）246
忘年の友（ぼうねんのとも）247
六日の菖蒲（むいかのあやめ）248
目引き袖引き（めひきそでひき）250
雌鳥勧めて雄鳥時を作る（めんどりすすめておんどりときをつくる）251
藪井竹庵（やぶいちくあん）252
山階道理（やましなどうり）253
横板に雨垂（よこいたにあまだれ）254
海獺の皮（らっこのかわ）255
参考文献 257

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co